伊勢物語

芥川　―　現代語訳　―

昔、ある男がいた。女で手に入れられそうもなかった人を、幾年にもわたって求婚し続けたが、やっとのことで盗み出して、とても暗い夜に（逃げて）来た。芥川という川（のほとり）を連れて行ったところ、草の上に置いていた露を（見て）、（女は）「あれは何か。」と、男に尋ねた。

目的地までまだ遠く、夜も更けてしまったので、鬼がいる所とも知らないで、（そのうえ）雷までもとてもひどく鳴り、雨も激しく降ったので、荒れ果ててがらんとした蔵に、女を奥のほうに押し入れて、男は、弓や、胡籙を背負って戸口にいて、早く夜が明けてほしいと思いながら腰を下ろしていたところ、鬼が、早くも一口で（女を）食べてしまった。「あれえっ。」と（女は）悲鳴を上げたが、雷が鳴るやかましさのために、（男は）聞くことができなかった。次第に夜も明けていったので、（男は蔵の奥を）見ると、連れて来た女がいない。（男は）地に足をこすって（じだんだを踏んで）泣いたけれども、どうしようもない。

白玉か…あれは真珠かしら、何かしら、とあの人が聞いたとき、あれは露だよ、と答えて、その露のように私も消えてしまったらよかったのに。

これは、二条后が、従姉妹の女御のおそばに、（女房のようにして）お仕え申し上げるようにしていらっしゃっていたが、顔立ちがとても美しくていらっしゃったので、（男が）盗み出して背負って連れ出したところ、兄上の堀河の大臣、ご長男の国経の大納言が、まだ身分も低い者で宮中へ参上なさると、ひどく泣く人のいるのを聞きつけて、引きとどめて取り返しなさったのだった。それを、このように鬼（の仕業だ）と言うのであった。まだとてもお若くて、后が（入内以前の）普通の身分でおいでだったときのこととか。